

# 世界遺産登録に向けて

## 鶴子銀山(12) 田中清六の銀山経営

田中清六は、諸国から山師たちを呼び寄せ、山を見立てさせ、金銀鉱脈を見つけるまで自由に採掘させました。鉱脈を発見した山師には、「心労分」として最高10日ほどの期間、自由に鉱石を穿りとりせました。これは、鉱脈発見までの費用を山師に支払うやり方で、石見銀山でも同じことが行われていました。

そして、その場所の採掘を望む山師たちに、10日間を基準として運上額を入札させ、最高落札者に稼がせました。落札した山師らは、その稼ぎ場に大勢の穿子を送り込み、昼夜の別なく鉱石を穿らせました。

このような方法であるため、鉱山の専門家の山師でなくても、多数の穿子を動員できる商人などが金銀採掘競争に加わるようになり、開発も相川方面へと拡大し、人口も激増していききました。

清六は、これ以外にも、銀山で用いる諸道具の調達に、手腕を発揮しました。たとえば、細かく砕いた鉱石を選び分ける篩という道具があります。この篩の目には、馬のしっぽの毛が最適でした。そこで清六は、

かねて親交のあった盛岡藩主の南部利直に、南部馬のしっぽの調達を依頼しました。利直は、家臣の上野右近に「田中清六、馬の尾望に付き遣候、慥かなる案内者に申し付、小荷駄馬の方、残らず切らせ申すべき候也」(『脇野沢の歴史』)と命じています。かくして、慶長7(1602)年の『当代記』に、「この頃より佐渡国に銀倍増して、一万貫余上へ納めらる、先代越後景勝彼国領納の時分はわずかなり」とあるほど大盛りととなりました。しかし、それは清六の立場を危うくする出来事の始まりでもありました。



細かく砕いた鉱石を篩にかける図。篩の目に馬のしっぽの毛が使われるので、「馬の尾粉成」という。「佐渡の国金掘の巻」より

◆市役所産業観光部世界遺産推進課  
☎ 63-5136



## ジオパーク、推進日記

74

### 『沢根の化石とジオパーク講座』

佐渡の化石産地は、30以上あります。古くは3億年前から、新しいものでは縄文時代の化石が産出されています。

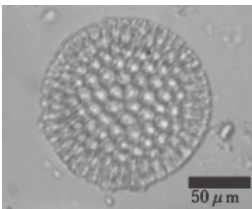
これまで多くの研究者が佐渡の化石を対象とした研究に取り組み、佐渡の層序や古環境について論じてきました。中でも佐和田地区沢根は、およそ1700万年前に日本海が誕生し、それ以降の海底にたまった地層の模式地として有名な地域です。つまり、中山トンネルから沢根質場のルートを歩くことは、1700万年前から80万年前までの時間を一気に進むこととなります。

沢根の地層から出てくる化石の種類は、目に見える大きなものでホタテガイ、エゾタマキガイなどの貝化石、クジラやニシン科の魚の骨、カ

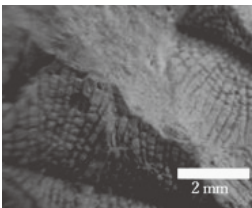
シパンウニや単体サンゴなどが産出します。珍しい化石ではエイ類の鱗、深海にすむウニ、ゴカイなどが発見されました。そのほか、深海底にたまった植物プランクトン(珪藻化石)や有孔虫(原生動物)など顕微鏡で観察する化石も地層の中には無数に含まれています。これらの小さな化石の殻は、大変面白い形をしているので、見ていて飽きません。

化石を見つけることは、大変楽しい体験ですが、化石を研究することで、地層の年代や当時の環境、進化の過程などが分かります。化石は、まさしく過去を語るメッセンジャーなのです。

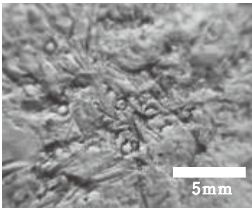
ジオパークの講座では、このような視点で化石を探究しています。ぜひジオパーク講座にご参加ください。



珪藻化石  
(海生の珪藻)



エイ類の鱗化石  
(イバラエイの鱗)



深海ウニの化石  
(小さな丸い粒が棘の抜けた跡)

◆市教育委員会社会教育課ジオパーク推進室  
(畑野行政サービスセンター内) ☎ 66-4160